

機関番号：14401
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2008年度～2010年度
 課題番号：20710191
 研究課題名（和文） ブータンの草の根レベルでの食料安全保障と、自立を目指した政策と援助の方向性
 研究課題名（英文） Grass-root level food security in Bhutan and direction of aid policy aiming at self-reliance
 研究代表者 上田 晶子（UEDA AKIKO）
 大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・特任准教授

研究者番号：90467522

研究成果の概要（和文）：本研究は、ブータンの食生活になくてはならないトウガラシに焦点をあて、その入手状況から、草の根のレベルでの食料の確保の状況を分析し、自立的で持続的な食料の確保を目指すための政策と援助方法を明らかにした。特に、トウガラシの入手の方法において、人びとが物々交換と貨幣による市場での交換という二つの入手ルートを、それぞれの長所と短所にあわせ、戦略的に使っていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This research have examined the situation of food security at the grass-roots level in Bhutan focusing on chilli which is indispensable to Bhutanese diet, and proposes policies and direction of aid assistance which enhances people's food security in sustainable manner. The research particularly finds that people use two modes of transaction, i.e. barter and transaction at market places with cash, to obtain chillies strategically based on their recognition of strengths and weaknesses of each mode of transaction.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：南アジア、ブータン、食料安全保障、トウガラシ、農村開発、貧困、セーフティ・ネット

1. 研究開始当初の背景

ブータンでは人口の7割が農村部に住み、就業人口の8割が農業に従事している。また、同国では独自に定めた貧困ラインを下回る生活をしているのは人口全体の31.7%であり、農村部では人口の約4割近くが貧困ライン以下の生活をしている。タシ・ウォンチュクの調査によると、農村部の家庭の約20%が一年に3ヶ月以下の期間食糧が不足し、約18%

の家庭では一年間に3～6ヶ月間食糧が不足している。従って、農村部における食糧の安全保障の問題は極めて大きい。

本研究は、ブータン人の食生活には不可欠であるトウガラシに焦点をあてた。ブータンの食生活の特徴の1つはその「辛さ」にあり、トウガラシはスパイスとしてだけでなく野菜として大量に使われるほどその食文化を象徴的に示すものである。それは、ブータン

人が「ブータンの国民食」としてよく挙げる「エマ・ダツィ」という料理が、トウガラシをチーズソースで煮込んだものであることからわかる。また、トウガラシが、主食のコメやその他の穀物と同様の重要度をもつにもかかわらず、トウガラシには代用品がないこと（穀物はコメが入手できなければ、ソバ或いはトウモロコシというように代用品がある）また、トウガラシは、コメをはじめとする主要穀物やその他の食料と交換されることも多く、トウガラシに焦点を当てることにより、主食であるコメ、ソバ、ムギ、その他雑穀、また乳製品、肉類、野菜、果物等の主要な食物の確保の状況も知ることができると考えたからである。

さらに、コメなどの穀物は市場での価格が比較的安定しているのに対して、トウガラシはその変動が激しい。例えば、初物のトウガラシには1キロあたり牛肉の約二倍の値がつくのに対し、最盛期にはその10分の1にまで下落する。物々交換と貨幣経済の両方が家計に重要な役割をもつブータンの農村における食糧安全保障の問題を理解するには、トウガラシは一つの重要なカギとなると思われる。

一般に草の根レベルの食糧安全保障の問題は、生産量とともにその流通とアクセスの問題であると考えられている。本研究でも、トウガラシの流通形態と生産量・輸入量の変化を考察した。

食糧安全保障に関する研究は、概して、マクロな視点で食糧生産や食糧自給率について論じるものや、食糧の輸出入に焦点を当てたものが多く発表されている。これに対して、ミクロな視点で草の根レベルの食糧安全保障については、人類学の分野で研究が発表されている。

2. 研究の目的

本研究は、ブータンの食生活になくはならないトウガラシに焦点をあて、その入手状況から、草の根のレベルでの食料の確保の状況を分析し、自立的で持続的な食料の確保を目指すための政策と援助方法を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究方法は、ブータンにおけるトウガラシの生産、流通についてはフィールドワークによる聞き取り調査と、ブータン政府発行文書を用いた。また、ブータン国内での食糧安全保障を高める政策や援助機関によるプログラム・プロジェクトについては、ブータン政府文書、政府関係者インタビュー、国連機関、NGO、二国間援助機関の発行している文書からの分析、援助関係者へのインタビュー、現地視察等を行った。

ブータン国内での調査については、ブータン農業省リサーチカウンシルの全面的な協力を得た。実際のフィールドワークは、ブータンを西部、中央部、東部の三つの地域に分けて行った。これは、これらの地域ごとに、歴史的に、土地所有、季節ごとの人々の移動（トランスヒューマンズ）等の理由により、地域内の結びつきが強く、言語的にも似た言語が話されており、また、物々交換は各々の地域内で行われている場合が大半であるという事情を鑑みたためである。経済的には、西ブータンが比較的恵まれているのに対し、東ブータンは比較的貧しく、中央ブータンはその中間あたりの位置づけである。主食もコメの他に西ブータンではムギやシコクピエ、中央ブータンではソバ、東ブータンではトウモロコシが食されるという違いがある。

各地域では、食糧確保が困難とされている村と食糧が比較的充足しているとされる村を、事情が許す限りバランスをとって、選んで調査を行った。村の選定にあたっては、ブータン農業省と国連世界食糧計画（WFP）が共同で行った調査の結果であるVulnerability Analysis and Mappingや、ブータン政府発行のいくつかの貧困の現状分析の文書を参考にするとともに、各地域の農業普及員からの情報や調査候補地出身者からの情報も併せて考慮した。

フィールドワークを進める中では、以下の点に留意した。一つ目は、度量衡の単位についてである。ブータンでは地域により異なる度量衡が用いられているので、量の単位については常に注意深く調査を進める必要があった。また、二つ目には、物々交換の情報や、土地所有の情報については、第二、第三の情報源からその情報を確認することが重要であることである。

研究の結果について、同上の研究関心をもち、この分野で先端的な研究をおこなっているロンドン大学の人類学部、開発学部の研究者とも意見交換を行い、本研究の分析を深めた。

4. 研究成果

主な成果は以下の通り。

(1) ブータン西部地域

標高差に伴う収穫期のずれを利用したトウガラシの物々交換が歴史的に盛んに行われていること、それと同時に、現在では、市場での現金での取引も盛んになってきていることが明らかになった。これは、同地域の多くの農民にとって、市場へのアクセスが最近のインフラの整備により、容易になっていることと関係している。また、貧しい（特に所有する土地面積が小さい）農民の中には、食糧不

足を補うため、比較的裕福な農民から米を借り、それが返せないために借米が累積し、貸し手に労働を提供しなければならない状況に置かれている家庭がいくつもあることが判明した。しかし、該当の農民は、食糧の不足した時期に食糧を提供してくれるという肯定的な面も指摘していた。同様の状況に置かれている農民はブータン全体で多くおり、深刻な問題であるという示唆があった。セーフティ・ネットとして機能している仕組みがいつもポジティブな結果だけをもたらすものではないという意味をもつと解釈される。

このような借米が累積している世帯に対して、現地NGOが「ライス・バンク」という取り組みを行っている。これは、一定量の米を当該住民に提供し、これをライス・バンクの原資として、当該住民自らがライス・バンクの運営方法を話しあいの上、決定し、実際の運営を行っているという試みである。この取り組みに参加している住民からは、同じコミュニティ内で生活している米の貸し手（たいていは裕福な世帯）に頭を下げてお米を貸してほしいと頼みに行くのは非常にプライドを傷つけられることであったが、ライス・バンクの設立により、このようなことをしなくてもものなくなったこと。また、コミュニティ内の労働交換にも参加できるようになったことが、ライス・バンクに参加したことの利点として報告されていた。同時に、所有する土地の面積が、家族を養っていくには絶対的に小さすぎるといった状況に置かれている世帯にとっては、根本的な状況の打開をもたらすものにならなならず、ライス・バンクと合わせて、所得の向上をもたらす工夫と取り組みが必要であることが示唆された。

(2) ブータン中央部と東部

トウガラシの取引において、物々交換が重要な役割を果たしている地域がかなりの割合で存在している。特に、東ブータンのタシガン県北部において顕著であった。トウガラシの取引で、以前盛んに行われていた物々交換が衰退した地域の多くでは、人びとがその理由を、道路網の発達とそれに伴う商店の増加と理解している場合が多くみられた。また、農村部の多くの地域で、トウガラシの入手について、現金の取引と物々交換の特徴をよく把握し、トウガラシを質・量ともに十分に確保しようとする人々の工夫が確認された。

(3) ブータン政府と援助機関による草の根レベルの食料安全保障を高めるための取り組みについては、ブータン政府が、穀物だけではなく、野菜、肉類、乳製品などをふくむ包括的な食料安全保障の概念と枠組み作りに

取り組んでいることが明らかになった。また、そこには、FAOなどの国連機関も積極的に協力していることが明らかになった。

一方で、前述の現地NGOによる取り組み（ライス・バンクなど）は、農業省や援助機関には、知られていなかった。今後のライス・バンクの展開を考えると、当該NGOと農業省や援助機関との連携も有効である可能性もあり、本研究の成果も含めて、これらの機関との情報の共有に努めた。

(4) インパクトと今後の展望

食料の確保の状況を調査するなかで、現在まで行われてこなかったブータン農村部での共同体内における経済格差の問題の重要性が、浮かび上がってきた。また、現地NGOによる共同体レベルでの食料確保への取り組みを実践の例として取りあげるなかで、自立を目指した援助は、主体者自身に意思決定権を持たせることはもちろんのことではあるが、それに加えて、行政や、コミュニティの年長者や長（そして本件の場合には当該NGO）といった関係する人びとのコミットメントが、プロジェクトの成功の重要な要素のひとつになっていることが見出された。

今後の研究では、共同体内での格差の要因を、土地所有の形態、共同体内での労働の取り決めに焦点をあて、今回の研究を更に深めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計3件)

1. Akiko Ueda "Meaning of education and school in rural life in Bhutan", The Centre for Comparative and International Education Public Seminars: "Education and the Politics of Culture and Modernisation in Bhutan", 1 March 2011, University of Oxford, UK
2. Akiko Ueda "Chilli trading practices in Bhutan: Past and present", 12th Seminar of International Association for Tibetan Studies, 15-21 August 2010, University of British Columbia, Canada
3. Akiko Ueda "Food Security and Gross National Happiness", International Conference on Gross National Happiness, 23-26 November 2008, Thimphu, Bhutan

〔図書〕(計3件)

1. Akiko Ueda and Tashi Samdup “Chilli transaction in Bhutan: An economic, social and cultural perspective”, in S. Mullard (ed.) (仮)Bhutan and Sikkim, 2011, Austrian Academy of Social Sciences (掲載決定)
2. Akiko Ueda “Food Security and Gross National Happiness” in K. Ueda and D. Penpore (eds.) Gross National Happiness: Practice and Measurement, (Thimphu: Centre for Bhutan Studies), 2009, pp. 568-581
3. 上田晶子 「取引の形態にみる草の根レベルのセーフティ・ネット：ブータンのトウガラシの例」査読無、上田晶子(編)『食料と人間の安全保障』GLOCOL Booklet 3, 2009, 大阪大学グローバルコラボレーションセンター、7 - 24頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/staff/ueda/index.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

上田 晶子 (UEDA AKIKO)
大阪大学・グローバルコラボレーションセンター・特任准教授
研究者番号：90467522

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号：